

人権なら

2017年8月1日

第80号

NPO なら人権情報センター

● ひと・まち・生き生き

「差別と人権」研究集会開催へ

9月2日、田原本青垣生涯学習センターで

第9回奈良県「差別と人権」研究集会の開催に向けた第2回実行委員会が7月19日、田原本町青垣生涯学習センター



であった。関係者が出席。開催要綱、協賛団体、任務分担などを確認した。写真は昨年の研究集会。

ことしの「差別と人権」研究集会は9月2日午前9時半から、田原本町にある田原本青垣生涯学習センタ

第9回奈良県「差別と人権」研究集会

◆9月2日(土)午前9時半～午後4時35分

◆田原本町・田原本青垣生涯学習センター

◆テーマ 激動する世界と日本。いまわしい差別と不当な人権侵害に異議申し立てし、より賢く、より強く、よりやさしく、自らが変わっていかう!

◆記念講演 長瀬修・立命館大学客員教授「障害者の人権と尊厳—障害者『安楽死』計画から障害者権利条約と障害者差別解消法へ—」

◆分散会 ①「『津久井やまゆり園』事件は私たちにいったい何を突き付け、何が問われたのか」②「子どもを孤立させず、育みを街ぐるみで生み出そう!」

◆参加費 3500円

いで開く。午前中は開会行事、基調提案、記念講演を行う。午後は分散会。そのあと、全体会を開き、分散会報告、全体討論。午後4時35分に終了予定。

記念講演は長瀬修・立命館大学客員教授に

記念講演は長瀬修・立命館大学客員教授が「障害者の人権と尊厳—障害者『安楽死』計画から障害者権利条約と障害者差別解消法—」の演題で話す。

長瀬さんは障害学を研究し、障害者制度などに詳しい。講演では、ナチス・ドイツの優勢思想に基づく障害者「安楽死」計画とは何なのか? 「津久井やまゆり園」事件がなぜ、どうして起きたのか? この事件をどう受け止めるのか、などについて、話をされる。

分散会は、第1が「『津久井やまゆり園』事件は私たちにいったい何を突き付け、何が問われたのか」を、第2は「子どもを孤立させず、育みを街ぐるみで生み出そう」をテーマにパネラーらが報告、討議する。

山城博治さんが講演

映画「標的の島風かたか」上映会と、山城博治・沖縄平和運動センター議長の講演会が7月16日、奈良県人権センター



であった。山城さんは辺野古新基地建設に反対するコールが奈良の地で続いてい ひまわりのメンバーらと山城さん(右)

ることに感謝の意を表明。長期拘留弾圧との闘い、大田昌秀・元知事の思い出、国連人権理事会でのアピール、現地での攻防と機動隊の暴力などについて熱弁。歌い、踊り、「諦めず闘い続けよう」と訴えた。

県民歴史講座が開講

同和問題関係資料センターが今年度も全6回

県立同和問題関係史料センターが主催する「県民歴史講座」

の開講式が7月4日、同センターであった＝写真



奥本武裕・所長が「開講にあたって―地域社会の歴史から何を学ぶか」をテーマに話をした。

奥本さんは、林屋辰三郎さんが著書『歌舞伎以前』（岩波新書・1954年刊）で述べている「民衆の歴史的生活を明らかにするためには、三つのよりどころがあると思う」を取り上げ、「一つは地域史研究、二つめが部落史研究、三つめが女性史の研究」だと紹介した。

ところが、林屋さんの提起にもかかわらず、これらの領域は日本史研究・歴史教育の中の特種分野として扱われ、日本の歴史全体の中に位置づけられてこなかったのでは、と思う。一般向けの歴史書、観光案内書などにおいても、とりわけ部落問題については「注意深く避けられてきた」感がある、と述べた。

また、人気番組「ブラタモリ」にも出演している梅林秀行さん執筆のガイドブック『京都の凸凹を歩く―高低差に隠された京都の秘密』（青幻舎）も紹介した。

部落問題は多様な人権課題の1つと位置づけ

次に、「部落差別の解消に関する法律」が昨年12月に施行された意義と、県が2009年11月に実施した「人権に関する県民意識調査」をもとに説明した。

被差別部落に向けられた忌避や排除という意識の解消のためには、「部落問題を日本社会における多様な人権課題の1つとして位置づけ、他の人権課題と共通する側面、部落問題に固有の側面を明らかにすること」。そして、「部落問題を部落内外の社会関係の問題として位置づけること」が大切。「被差別部落の歴史や実態」だけを学ぶのではなく、「社会的関係が生

じる場としての地域を想定」することが大切と述べた。

多様な被差別民の姿を生き生きと紹介展示

続いて、「なぜ部落史の見直しが必要だったか」を話したあと、奈良県における「部落史の見直し」の概要を説明。「政治権力創出論」や「貧困低位論」、「支配者による条件の悪い土地への強制移住論」、「刑吏役や弊牛馬処理など、人のいやがる仕事の強制論」などを見直してきた、と話した。また、奈良以外の各地でも「部落史の見直し」が進展し、その成果は社会科教科書にも反映されている、と述べた。

最後に、地域社会に注目することが何よりも重要だと述べ、①地域社会に存在する共同・協働、相互扶助の諸相②地域社会に存在する抑圧・排除の諸相などを、資料を示しながら説明した。

このあと、清水有紀・研究員がセンター常設の展示を案内した＝写真。

「大和の地域社会と被差別民衆・新しい地域社会の創造をめざして」と銘打った展示は、多様な被差別



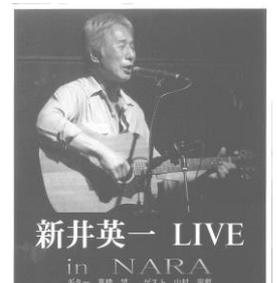
民衆の活動や、その姿を生き生きと紹介している。

今後の講座は、第2回が8月8日、第3回が9月26日（現地研修）、第4回が10月24日（同）、第5回が11月14日（同）。第6回は12月5日（講演会）。

三宅町で新井英一ライブ

新井英一さんのライブが8月19日、三宅町文化ホールである。場所は伴堂689。

午後5時開演。協力費3000円。主催はムジゲ（ハンブル語で虹の意）。予約と問い合わせは松田さん（090-2287-9930/arirang01220614@iris.eonet.ne.jp）。



やまゆい事件 1周年で集会

事件後、障害者政策は根本から変わったのか

「やまゆい園事件から1年・地域で暮らしていくために、今、何が足りないか」をテーマにした集会が7月26日、奈良市中部公民館であった＝写真。「相模原やまゆい園事件から1年」奈良県実行委員会と障害者差別をなくす条例推進委員会が主催した。



知的障害者の組織、ピープルファースト奈良のメンバーが司会を務め、ひまわりの家の渡辺哲久さんが経過を報告した。「昨年12月18日の県集会で講師の藤井克徳さんが、この事件の前と後では、日本の障害者政策は根本から変わらなければならない」と述べた発言を紹介。「何が変わったのでしょうか」と問うた。「事件の根本には、地域で支え切れない重度障害者を収容する大規模施設が抱える矛盾と、職員の疲弊、格差社会の深まりによる出所のない怒りがある」。

だが、安倍首相は「施設の安全確保の強化、措置入院後のフォローアップなど」、速やかな実行を指示。厚生省は施設に防犯カメラなどをつける補助金を作り、措置入院の患者の事後監視を強めるために精神保健福祉法の改定を図る。政府がしたのはそれだけだ。

地域で暮らせることの大切さを当事者が訴え

また、「やまゆい園の建て替え問題」や「被害者匿名報道」などの議論や経過も報告した。奈良では、昨年4月、「障害者差別をなくす県条例」の施行や、「心身障害者医療費助成制度」の対象でなかった精神障害者を2級にまで適用する施策が始まった。これらは、当事者、精神障害者の家族会の努力なくしては実現しなかった。「これがあれば地域で暮らせる」との声を上げ、奈良をもっと良い街に変えていこう、と述べた。

このあと、会場からの発言が続いた＝写真。精神障害者団体で活動する人は「課題はあるが、地域で暮らすことが大切だ」と。家族会からは「精神保健福祉法改正案」の廃案を求める意見書を衆院議長・厚労大臣に送った、と。自閉症協会からは「どんな重度の人でも見える場や、介助の質・力量などが問われる」。「インクルーシブ教育」が言われるが、「障害者に金をかけるな、との批判やヘイトまがいの嫌がらせが続く」とも聞く、と。重度身体障害者は「40年前から運動を始めた。親に殺されたらあかん、が原点。地域で自立生活を始めて20年。しんどいこともあったが、地域で暮らしてきて良かった」と。イギリスでの生活体験がある重度身体障害者は「セフティーネットが大切」「当事者と家族の両方をエンパワーメントすることが大切」と。ピープルファースト京都からは、事件が起きて怖かったことや感想などを仲間の意見として紹介した。



権利条約にある闘いの思想を大切に

小嶋真人・奈良県障害者協会副代表は「意見の違いがあるが、共に考え、意見を出し合うことが大切」「被爆者運動をされている人の思いや意見」「沖縄の座り込みを続けている人の、あきらめない」との思いに突き動かされる。「障害者権利



集会開催の情宣活動に参加したひまわりなどのメンバーたち
(7月13日、近鉄奈良駅前)

条約に述べられている闘いの思想」の大切さ改めて考える、と発言。ピープルファースト奈良からは2人が発言。ピープルファースト兵庫からは自分たちから「ふれあいを訴えていくことが大切」と話した。

最後に、奥田和男・NPO奈良県精神障害者家族会連合会理事長が集会決議を読み上げた。

カンボジアの風

<19>

ポイペトで「国境食堂 HARU」をオープン

ご無沙汰しています。古川沙樹です。いつも応援していただき、ありがとうございます。

私が初めてカンボジアを訪れて14年。その後、カンボジア語で平和という意味をもつNPO法人サンタピアップの活動を始めて12年が過ぎました。



私は今、新たな挑戦を始めました。ずっと活動していたタイとの国境の街、ポイペトで日本食とカンボジア料理のお店「国境食堂 HARU」(写真)をオープンさせたのです。このポイペトは私にとってカンボジアの中で一番好きな街です。

ポイペトはここ数年、目まぐるしく変化しています。工業団地が稼働し始め、日系の会社も数社が参入しています。どの会社も誰もが耳にしたことのある大きな会社です。道路をはじめ、インフラも整ってきました。数年前まではなかった電気も、まだまだ安定しているとは言えませんが、24時間通るようになりました。

編集後記 ★★★★★★★★★★★★

政治不信が渦巻いている。内閣不支持率も急騰。政権は末期症状を呈する。原因は政治に携わる人たちの余りにも理不尽な振る舞いにある。人々の怒り、不満、不平が高まっても、意に介せず、戦争屋や特定者の利権を優遇する政治を強行する。一方で、人々の怒りを受け止める政党が見当たらない。こんなとき、危険な動きが出てくる可能性が高い。ポピュリズムか、ファシズムか、ナショナリズムなのか……。人間の尊厳や人権を軽視する偏狭な差別排外勢力が登場し、人々の不満をかすめ取るかも。私たちは騙されず、冷静に物事を見極める力を身に付け、行動していこう。

工場ができ雇用が生まれ、数年前と違う光景

ポイペトはタイと国境を接しているため、安易に越境し、タイ側に出稼ぎに行くことができます。ただ、パスポートを持たずに密入国者として行くことが多いため、大きな危険を伴います。雇用条件、仕事内容、環境、どれも人権が守られているとは、とても言えないようなものです。私の知人にも出稼ぎに行き、亡くなって帰ってきた人が何人かいます。それでも、こぞってタイに出稼ぎに行くのです。ポイペトには仕事がないからです。



工場ができることで雇用が生まれています。人々が安心して「働ける場」ができ始めています。数年前では考えられなかった光景です。ポイペトに居る日本人は私一人だけだと思っていたのですが、現在は11人。これからどんどん増えていくようです。この工業団地がポイペトの人々の生活にどのように影響していくのか。注目していきたいと思っています。



『カンボジアからの風』展 Vol.6が7月12日から8月

4日まで、ひまわり「みそら屋」であり、賑わった。ポイペト郊外の村で「貧困」を抱える人たちが技術



を習得し、お金やモノ・仕事を生み出せることを目標に活動する「サンタピアップ」が企画。手作り商品を沢山展示、販売もした。

ニュースレター「人権なら」

発行:NPO法人なら人権情報センター

〒636-0223

奈良県磯城郡田原本町鍵301-1

TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833

E-mail:info@nponara.or.jp

http://www.nponara.or.jp/